

栄枯盛衰

萩屋ものがたり

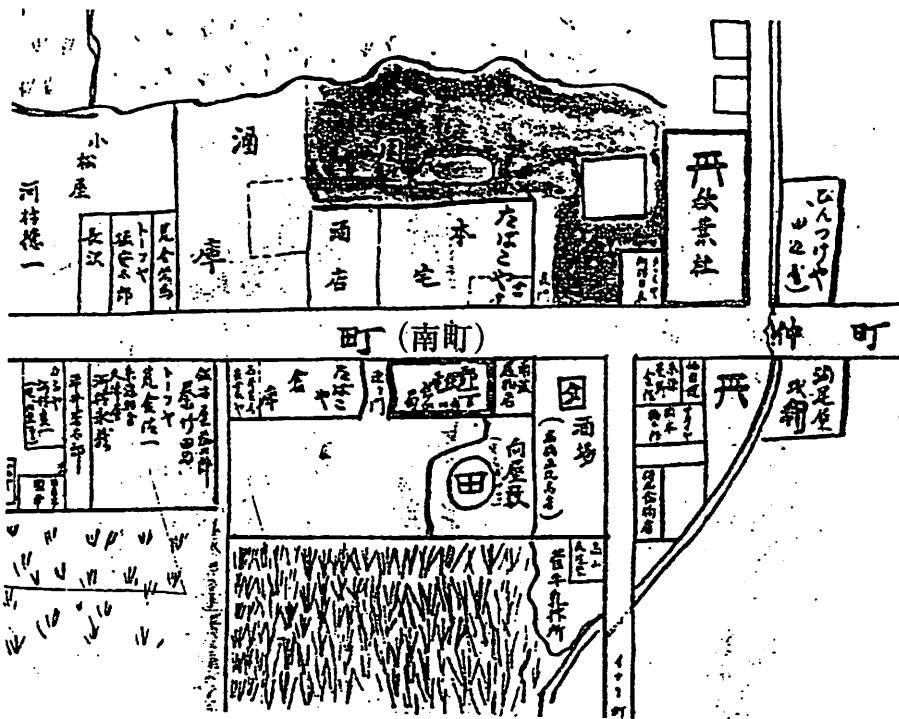
入江 秀 利

「荒金たばこやには及びもないが、せめてなりたや殿様に」という戯歌が幕末の横灘（別府）にあつたかどうか？

「たばこや」（萩屋・多葉粉屋・苺屋・煙草屋）の全盛期は、南町から野口まで他家の土地を踏まずに行けるといわれ、別府村に約四〇町歩の田畑と山林を持つ大地主でした。

商は主に酒造業で、のちに七嶋産、生姜の商品作物の問屋をかね自家の回船で大坂や瀬戸内海岸に搬送していました。

萩屋の「諸用留」によれば、天保七年の饑饉のため酒の仕込みが三分の一に制限されました。例年の酒造量は千石から三百三十石に減少され、酒造米は三分の二の六百六十石に減石されました。萩屋の莫大な米穀収入を想像する事が出来



ます。醸造用水は吉備山の伏流水を朝見の湧水池から、竹樋や芯を抜いた杉丸太を連ねて南町まで引いたそうです。萩屋

の敷地は秋葉神社南の一面で、旧市役所の跡地から往還おうかんの南町を越えて大分銀行やカトリック教会の一郭を占める膨大な土地でした。今の煉瓦れんがホールの場所にあった土蔵造りの建物の一部が松原の高野山に移築されて本堂として最近まで残っていました。

大分銀行の西には伝馬船を浮かべた泉水（図黒塗りの一部）があり、「本家新宅合わせて城郭のような邸内に、勘定方や倉士などの使用人の下屋敷が周囲をとりまき外郭を形成していた。本宅には十畳以上の座敷が一四室、広書院三室、茶亭二つ、部屋の総数八〇室を越えた。」「別府今昔」大邸宅で、家屋のほかに金蔵・酒倉・米倉のほか諸倉庫が立ち並んでいました。また、本家分家に番頭・手代・丁稚が一二六人いたといわれます。

### 日向三治こと市郎左衛門 — 萩屋の起こり —

そもそも南町萩屋の出自しゅつじは日向高千穂長崎村の三治という煙草行商人だったといわれます。

正徳の頃（一七一―）、三治は温泉宿で入湯客を相手に刻み煙草の行商をするため、田野口村迫さきの荒金惣左衛門かたに逗留していました。そのうちに惣左衛門は、実直で商売上手

な三治の才能を見込んで娘の婿に迎えます。

三治は荒金市郎左衛門と改名して、南町にささやかな見世みせを開いて煙草売りを渡世にしました。市郎左衛門は「城島しろの煙草」を販路にのせて成功したと云われます。その後しだいに店舗を拡張して「萩屋」は大いに繁昌しました。

正徳四年（一七一四）、長男の市郎兵衛をもうけました。

この市郎兵衛も父に似て勤勉力行の人で、少年の頃から馬を曳いて鳥居峠を越え城島まで葉煙草の仕入れに出かけたそうです。

寛延元年（一七四八）に長男の通吉みちよしをもうけましたが、市郎兵衛は父親の市郎左衛門に通吉を託して早世しました。

通吉は生来俠氣に富み素行が荒く、三代目の例に洩れず父親に似ぬ放蕩息子で、別府や浜脇の遊女屋町を押し歩いて喧嘩通吉と渾名あだなを流し、松原の名月楼の遊女と所帯を持つといだして祖父の市郎左衛門を悩ませました。

ついに、業ごうを煮やした市郎左衛門は涙を吞んで通吉を勘當し、隣家の茶屋河村萬右衛門の三男を孫娘の養子に迎えて萩屋の跡目を嗣ついでがせました。

養子通亮みちあきらは祖父市郎左衛門の目がねに叶い、市郎左衛門を襲名し、夫婦力を合わせて店を盛り上げましたので、市郎左

衛門は安心してこの世を去りました。

※城島の煙草栽培記録は残っていません。

### 通吉こと市郎兵衛 — 萩屋の身上固め —

勘当された通吉は別府を飛び出して、日田郡代役所の足軽になり、勘定奉行検見方役梶原某の手代として、村々の青田検見役の下役人として羽振りをさかすようになりました。

しかし、通吉は天明七年の大飢饉で起こった天領日向富高の百姓一揆を扇動したという嫌疑を受けて、役所を追放されました。

役人としての出世を断念した通吉は、もと検見役の経験と知識をいかし、期米（先物）相場で一旗揚げようとします。

当時九州の米の相場は長州の下関が本場で、関米相場は下関から豊後路の見通しのよい峠を結ぶ狼煙や炬火の信号で連絡しあい、その夜のうちに豊後まで知れたといえます。別府では日出の鹿鳴越峠と赤野峠に番小屋があり、通吉は毎夜赤野の通番小屋に通って情報を仕入れ相場をはりました。

初めのうちは損ばかりしてしだいに身上を潰し、ついに家財道具を処分して出た大勝負に目が出て、一夜で百五十両ばかり儲けました。

通吉はこれに満足せず、本場の大坂堂島に出て米穀問屋に住み込み、手代のかたわら毎日の米相場の動向に精根をかため、二年間研究したうえで自分で手張りを始めました。

手張りはトントン拍子に大当たりを続け、三年目の寛政三年（二七九一）四三歳の春、法外の巨利をえました。

通吉は荒金丸を仕立て金銀を四斗樽三十丁に詰め船に載せて手代を引き連れて海門寺浜に降り立ち、幼友達や町の年寄りを招いて美妓に大尺舞を踊らせて歓待したそうです。

萩屋を経営していた養子の市郎兵衛は、義兄の大成を喜び、本家の家督を返すので相続するよう勧めましたが、通吉は、流川府内屋南の仲町に広大な邸宅を新築して分家を創立しました。

間もなく、娘の養子に大分郡乙津村の里正池部家の三男儀八郎通直を迎えました。

朝見八幡社が、松原の御旅所に行幸する時に通る朝見川左岸の土手道「お通り道」の庚申仏に、

「寛政三年十二月、別府住荒金

市郎兵衛通吉」

と刻まれた石の鳥居が最近まで残つ



ていました。(現在撤去)

萩屋一門の台頭を物語る遺物だったと思います。

通吉は享和元年(一八〇二)、米相場から完全に手を引き、仲町の自宅に隠居して悠々自適の生活を送っていました。晩年、貧しい人に金を貸しても返済の催促をせず、盆や節季に貧困の家を尋ねて、門口から秘かに金品を投げ込むなどして陰徳を積んでいたようです。

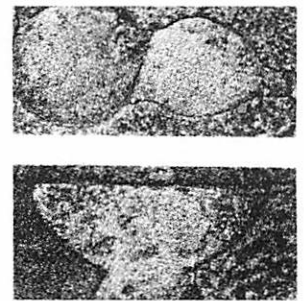
通吉は文化元年一月に大往生しました。

**通亮こと二代目市郎左衛門** — 朝見水道の創始 —

通亮こと二代目市郎左衛門は、酒造業を始めて清酒の醸造に励みました。

萩屋は地元の醸造用水にこと欠いていたので、豊富な湧水を探していましたが、田野口村峯田三左衛門家の宅地内に良質な湧水がある事を聞き、この水を萩屋まで曳く事を計画しました。地主の三左衛門地は、使用料として一年に米三斗、酒六升の契約を結び、文化八年(一八一二)に南町まで竹の樋や芯を抜いた杉を連ねて水道をひきました。先年地下工事をする時に芯を抜いた杉丸太の導管が掘り出されたそうです。この時、水道管の一部として朝見八幡から杉の木を寄贈して

もらったお礼として、境内や参道の整備をしました。この時、朝見八幡の参道の敷石に商売の酒に因んで、瓢箪の徳利と盃形の切石を敷込んだところ、それが大評判になつて大いに宣伝になつたそうです。



南町に引かれた朝見の水道水(別府最初の水道)は萩屋の清酒醸造に用いるだけでなく、南町三ヶ所に石組みの貯水槽を拵え、住民にも開放して飲料水を供給しました。渇水期でも豊かな水があつたので、「萩屋の水」と呼ばれて重宝がられました。萩屋の貯水槽は明治二二、三年頃まで残つていたそうです。

また、醸造にあわせて、荒蕪地や遊休地に商品作物の生姜を栽培しました。生姜は別府の特産物で、特に旧市役所跡あたりから梅園町、海門寺一带は萩屋の生姜や七嶋蘭の畑で、海岸の砂浜には生姜生場(穴蔵)が掘られ、「汀沙薑窖—砂浜は生薑穴蔵」と詠われる穴蔵が連らなっていました。萩屋の乾薑は大阪の薬種問屋に回漕されて薬種や香料となりました。七嶋蘭草の栽培も盛んで、七嶋蔞を瀬戸内や大阪の商人と直接取引をしていました。

※生姜漬けは戦前まで別府のおみやげ品でした。

儀八郎こと直通 — 文芸の時代 —

儀八郎は通吉の娘の入婿で、本家の市郎左衛門を助け家業の発展に加勢しました。萩屋の身上は実直な儀八郎の信望のうえに築かれたと云われ、儀八郎に負うところが大きい。

儀八郎は商人としての才覚の外に豊かな教養人で、風流を嗜み二〇才で俳諧を八千房屋烏宗匠に師事し所思亭伍尺の俳号を許されました。以後、儀八郎は呉石の俳号を称しました。

また、梅守・梅亭・香影などがあり、宗匠として近郷の俳人の面倒をよく見ました。

また、梅守・梅

亭・香影などがあ

り、宗匠として近

郷の俳人の面倒をよく見ました。

引き残る夜汐の光る餘寒かな

呉石

儀八郎は俳諧の後継者として、豊前宇島中須賀の俳人半仏の弟宗十郎（丘鳥）を養子に迎えました。

また、呉石は乙津村の碩学後藤碩田（今四郎）と昵懇で、碩田を通して田能村竹田、帆足杏雨、毛利空桑、津田秋臯、西法寺蘭谷など多くの文化人と知己を得て交友が盛んで、仲



町の荒金邸はさながら文化サロンの賑わいを呈しました。

天保二年（一八三一）、竹田が儀八郎を訪れたとき梅を愛する呉石のために「暗香疎影図（国指定重要文化財）」を描いたことは有名です。

呉石は進取の気風にとみ、長崎の異人がもたらした電話機を使って、南町の本家と西法寺の間に電線を架け通話の実験をしたので、高松役所の役人が見物に訪れたとか。また、慶應元年（一八六五）、長崎から竹中傳吉という写真家呼んで写真を撮りました。竹田の瓢筆画と和時計を背景にした呉石の写真は、別府では最も古いものです。

行灯からいち早く石油ランプに切り替えたのも萩屋でした。また、万延元年（一八六〇）、「西洋砲術製薬其外御教授方江戸御役人」を偽称する浪人福原麟之助に舎密術（化学）を

習つて火薬やリンを作つたために、宗十郎や本家の猪六が長崎奉行に検挙された事件がありました。儀八郎の進取の気性が禍わざわいした事件でした。(別府史談第三号・ボスポール)

萩屋の正徳年間から大正十三年までの古文書、古記録は、儀八郎が書きのこした「諸用留」わずか一冊しかのこつていない。

「諸用留」は天保七年から安政七年改万延元年庚申まで約五十年間の記録で、

「何事によらず少し異なることは後代の為になり 或は村方其の外の家の見合に相成候 年々月々失念無く善悪邪正によらず筆まめに印し置き 折々是を読みて何か心かけ稼業を出精これありたきことなり」

ではじまる備忘録です。今では貴重な史料になっています。わずかに残る萩屋の系図は、儀八郎の娘が西法寺に嫁ぐときに持参したそうです。

### 市三郎こと二代目市郎兵衛 — 全盛期 —

儀八郎は文政二年(一八二〇)長男の市三郎みちひさ通久をもうけましたが、市三郎は市郎左衛門の遺言で本家の家督を相続し、襲名して二代目市郎兵衛を名乗りました。その後、分家の実

父儀八郎と力を合わせて萩屋の興隆をはかり、全盛期を迎えました。後年、本家の市郎兵衛の娘(儀八郎の孫)を分家の養子宗十郎の嫁に迎え、荒金一族の結束を固めました。

儀八郎や市郎兵衛(市三郎)は先代なごらに倣つて貧しい村人に盆正月に金品を与えたので、農繁期には大勢の村人が加勢に來たといひます。また、災害や饑饉の折には他村の者まで救いの手を差しのべました。

一多分困窮こまへの小前(百姓)へ別府村萩屋市郎兵衛(市三郎)殿より銀子下され候 組内貫い候者は茂右衛門、太兵衛、次作、長兵衛、此の四人 亦々久左衛門、孝次、八右衛門、策左衛門など少々づつ施行これあり候『家宝珍事記』

これはほんの一例で、儀八郎も市郎兵衛も度々高松役所(大分の高松にあつた嶋原藩の役所)から褒賞を受けています。

また、嘉永三年八月の大暴風雨で、米作は皆無状態で米価が急騰しました。このため暴動が起り、暴徒が別府村の米屋一六軒、浜脇村の米屋八軒を襲い、高松役所の役人が出張して取り押さえました。市郎兵衛は此の饑饉に対しても近郷の飢民に莫大な銀子を差しだして救援しました。

安政元年(一八五四)大地震・同二年大暴風雨による朝見川の氾濫・同四年南町の大火や災害が続きました。萩屋は救

済に大きな支出がありました。

豊かな財力で肥後・嶋原・延岡・岡・府内各藩に金銀御用達の掛屋も勤めていました。土呂久銀山とろくで賑わう延岡藩の別府村や浜脇村の蔵所の蔵本も勤めていました。そのため別府では肥後・嶋原・岡・府内・延岡の藩札が通用しました。

朝見八幡は別府村の産土神うぶつちかみで、石鳥居いしとり（前出）のほか、境内に文政二年（一八一九）、市郎兵衛が寄進した石灯籠もありません。また、祭で神輿が行幸する時は、騎乗で鎧よろいを携えた萩屋の惣領が駆けつけて合図をするまで出発できなかつたそうです。

天保九年（一八三八）閏四月、幕府巡見使の平岩七之助一行が昼休みし、天保十二年（一八四一）十一月、府内の前藩主大給閑山侯おほまげのかんざんが江戸からの帰路、萩屋に立寄って宿泊したのも市郎兵衛の時です。

慶應三年（一八六七）、別府村は嶋原藩預あづけから肥後藩預に代りました。市郎兵衛は肥後藩のすすめで幕府に多額の征長金せいちやうきん（長州出兵の費用）を寄進して、その功により一代苗字帯刀を許され、念願の浜脇村庄屋に任命されました。

役所の威光を背景にした荒金市郎兵衛は、高松役所の庄屋寄合所の席次で上座に座していましたが、御一新になって幕

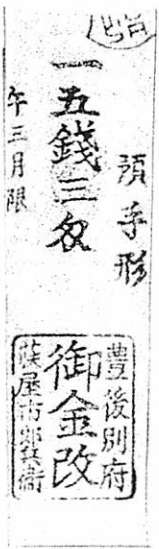
府が倒れると一時姿をくらましたという話が残っています。それでも晩年の明治五年には十五小区（立石・朝見・別府・浜脇村）の副戸長になりました。

萩屋の蓄財について、一説に高野山から割り当てられた高野金の融資を行い、その利得の一部を受け取ったといわれます。萩屋はその功により、高野山の境内に萩屋名義の杉・檜の造林を許されていました。萩屋が倒産した時その山林を売却してわずかな資産を残すことができたという後日談があります。

#### 猪六 — 萩屋の絶頂期から衰退期へ —

儀八郎や宗十郎の後見で、本家は市郎兵衛、その子猪六（通徳）と順調に業績をのばし、本家の「やまた」、分家の「かねた」「まるた」「かくた」「やまじょう」と分家の屋号も増え、商いも手広くなりました。引続き商品も本業の酒のほか七嶋延・生姜などの物産にも手を広げ、ついには回漕業かいそうぎやうにまで手をのばすことになりました。

また、御一新以後も豊富な資産と豊かな経済力を背景にして「たばこや札」の発行を許可されました。これは莛手形といわれる萩屋紙幣さつぱといわれ、金銀の正貨同様に通用しました。



明治二年に  
儀八郎が死去  
し、時代も幕  
藩政治から明

治政府に移り変わり、政治や経済の急速な変化はいかんとも  
しがたく凋落の一途をたどりました。

そもそも萩屋衰微の兆候は万延年間（二八六〇）のはじめ  
ころにあったといえます。猪六のお目出度い祝言の夜、披露  
宴の最中に金蔵の屋根の鬼瓦に長さ三間、胴回り一尺五寸も  
ある白大蛇がとぐろを巻いた。これを見た宴席の客が驚いて  
大騒ぎになりました。

その後、巷間に白大蛇が金蔵の外に出たのは萩屋衰運の  
兆であるとの不祥な噂が持ち上がったので、父の市郎兵衛  
は一二月末日、朝見八幡社で厄払いのため大金を投げ出して  
前代未聞の大祭を催しました。村人たちは「萩屋の千両祭」  
と評判しましたが、古老の話では不吉な予感ほ消えなかつた  
とのことす。

現実には、各藩に貸し出した御用金は、御一新の版籍奉還、  
廃藩置県で取り立が出来なくなり、莫大な損失を蒙りました。  
明治十年の西南戦争では、回漕業を営む萩屋は、百石積以

上四艘、五十石以上三艘の持ち  
船で、大阪から政府軍の軍需品  
を搬送して巨大な富を得ること  
ができたといわれます。

いつぼう、萩屋本  
家が西郷軍の壮士に  
襲われて大行李に詰  
め込んだ西郷軍の軍  
票西郷札と政府発行  
の太政官札との両替を強要させられ、西郷軍の敗北で莫大な  
西郷札が紙屑同然になり大損したということです。

明治十一年、猪六は商船会社の経営を勧められ、政府の西  
洋形蒸気船山城丸の払い下げを受けて、別府大阪間の汽船運  
送業の別府会社を設立しました。当時では珍しい絵入りの広  
告ビラを各地の宿屋や船問屋に配り、営業を始めました。

ところが、採算を度外視した大旦那の派手な営業方針で、  
広告費、営業費や人件費が嵩むなどで経営が思わしくなく、  
株主がつぎつぎと持株を猪六に押しつけて退社するなどして  
不運がつづきました。

不幸にも明治二十六年十月一四日、山城丸が宇和島沖で暴風



右、西郷札 左、太政官札



雨に遭遇して沈没、船員と乗客数十名が溺死し、積荷が流失して大損害を受けました。猪六はこの弁済として資産の田畑屋敷を抵当にして伊予銀行から三万円の大金を借金したといえます。

猪六の内情は火の車でしたが、世間体は相変わらぬお大尽様で、別府銀行の頭取を務め、また、分家の宗十郎や長男の貫一は県議会議員になって地方の財界や政界に貢献しましたが、度々の選挙で家財を資金につぎ込んで「井戸堀」となり分家も倒産同様になりました。

両家とも外見は豪壮な体面をたもちつづけました。

宗十郎は、明治三四年六九才で歿しました。猪六は補佐役を失い、三八年、家督を三男の五郎に譲り隠居しました。

#### 五郎 一破産一

猪六が亡くなると、派手好みの五郎は盛大な葬儀を催し、財政事情を知る参列者は読経を寂しく聞いたそうです。

五郎は別府銀行に勤めるかたわら、別府や浜脇の花柳界で芸妓を落籍して困い、ひいては京都の木屋町栄亭の養女喜多マツを女房にして京都では祇園大尽と評判されたとか？。

また、先祖の通吉に倣い米相場や株式相場に手を出したが

目がでず、家伝の書画骨董を売りさばき、萩屋の土地家屋を処分しました。煉瓦ホルの場所にあった御殿屋敷は松原高野山に売られて移築されました。

大正十三年の秋、萩屋倒産。

漏れ聞くとくところによれば、荒金氏の先祖は建久七年、大友能直の供をして別府地方に所領を得て、田野口・別府・石垣村に分かれて定住したことになります。

大友氏の失脚後、田野口村の荒金久左衛門藤原盛忠一統が、帰農し大百姓になって庄屋になりました。前出の荒金惣左衛門はその分家で、萩屋初代の荒金三治市郎左衛門はこの名門のお陰をもって稼業を創業できたと語り伝えられています。

萩屋の没落時は、ご他聞にもれず放蕩の末といわれていますが、嫉妬に根ざす世情の噂でしょうか。何れにしても、二百年近く地方の経済を左右するほどの大家の史料がこれほど完璧に失われることはありません。理由はともあれよほど丹念に処分したものと思われれます。

#### 参考資料

福田紫城氏のメモ、「別府市誌」「萩屋物語」入江秀利

完